

サロニエール  
ベル・エポックのイタリア社交界女性とその小説世界  
— アニー・ヴィヴァンティ Annie Vivanti [アン・ジョージ・マリオン・ヴィヴァンティ  
Anne George Marion Vivanti] (1866-1942) 著短編小説集『感激 GIOIA!』  
( Firenze, R. Bemporad e figlio 1921 ) 邦訳 (その1)

清 瀬 卓

〈Sommario〉

La *RES PUBLICA* artistica e letteraria è nata e coltivata, storicamente fin dall' antichità greco-romana persino ai nostri tempi, soltanto in salotto, anche se nella corte imperiale oppure nella casa privata della nobiltà o della borghesia in Europa. La *salonnière* è la donna di cultura, che sa bene accogliere ogni tipo di persone di talento a casa sua, per migliorare la qualità della vita intellettuale e umanitaria nell'ambiente senza confine, per così dire, cosmopolita. La *Belle Époque* era il periodo molto particolare in Europa, che ha raggiunto la grande fioritura della civiltà cosmopolita, grazie alla scoperta della nuova tecnologia finora sconosciuta, e anche al dominio del mercato mondiale attraverso la colonizzazione dei Paesi Afroasiatici.

Anne George Marion Vivanti, chiamata artisticamente Annie Vivanti, era una delle più brave *salonnières-écrivains* del tempo, ed anche una scrittrice perfettamente poliglotta, che ha avuto un buon successo nel mondo letterario europeo, pubblicando le sue opere sia in lingua inglese che in italiano. La lettura dei tre racconti vivantiani, tradotti per la prima volta in giapponese nel presente saggio di traduzione, vi presenterà la migliore repubblica letteraria della Belle Époque, caratterizzata con femminilità e cosmopolitismo di prima categoria in Europa.

IV. 《輝く妖精》 ( *Fata luminosa* )

《輝く妖精》とは私のこと。

こう明言すると、謙虚さを欠いている人間のように思われかねない。実のところ、書いていて恥ずかしくなる。

それでも、ある立派な教訓譚を物語ることに狙いなので、その物語をありのままに語ることにする。

たぶんローラのお気に召すだろう。

ローラと出遭ったのは、山だった。猛暑の夏だったが、私は不埒なアルピオンの残虐行為を解説する記事の執筆にかりつきりで、それを意識していなかった。ある日のこと、暦を見ようと、ふと眼を上げた時、夏がすでに遠のいていることに気付いたのだった。それに、私は田舎に出かけていたわけではなかった。例年のように、私は標高千メートルとか2千メートルのところ

にいたのではなかった。

「一番近くの山はどこかしら」——私は急いで帽子を被りながら、そばにいた人に訊ねた。

「マクニャーガ」との返答だった。

「善は急げ。マクニャーガへ出かけます。では、これで。」

十月のマクニャーガは誰もいなくて、マクニャーガで凍えてしまうよと、人は反論したが無駄だった。

私は出発した。

私がそこへたどり着くと、十月の太陽——一年を通して一番美しい太陽が碧玉色の空に輝いていた。モンテ・ローザ山の氷河が、眼がクラクラするくらい湯気を立てていて、巨人たちの蹴球試合のような轟音とともに、斜面で雪崩が発生して崩落した。

マクニャーガには誰もいなかった。

その方が好都合だった。太陽と雪の栄光のすべてが、私ひとりのものだった。

私は主人不在のまま支払をした。マクニャーガの主人は旅館を閉じていた。もし松林や氷河で野宿したくなければ、彼と共に平野まで降りていかねばならなかった。

私は降りていった。でも、できるだけ降りてしなわないことにする。私は山の中腹のチェッポ村に踏み留まった。そこは、野生の長之助艸のように片足を斜面に、もう一方の足を溪流に置いた格好の心地よい僻村で、私はマリーア夫人が経営するこじんまりした《アルプス館》に宿をとった。(マリーア夫人、もし貴女がこの物語をお読みになれば、私の挨拶のことは内心に感じて下さるでしょう。)

ローラと識り合ったのは、このチェッポ村だった。私が午後には学校のそばを通りかかると、彼女が二、三十人の子供たちに取り巻かれていて、皆が彼女に何ごとかを大声で叫んでいるのだった。彼女は返事もしないで、熱っぽく大きな黒い眼で私の方をジッと見つめていた。

私は彼女にことばをかけた。顔を赤くした彼女は、やがて蒼ざめ、私の名前を呟いた。私には、彼女の感動が大きさながらも、阿諛のように思えた。

午後、彼女は私に会いに来た。たくさんの花を持ってきてくれた。痩せている彼女は、興奮していて熱っぽかった。

村では、「若い女教師だって？ 気の毒に！ すっかりお手上げのはずだ」と噂していた。

彼女もある日、やや喘ぐように私に向かって「参ってしまうわ」と云った。その口調には、大きな不安とある種の浪漫的な満足感とが同居していた——「誰もがそう云っている。ミラノの医師たちも云っていた。私に注射をしてくれる当地の医師もそうだった。何をやっても無駄！ 私もお手上げなの。」

私は、大いに同情するとともに心が痛んだ。山地を駆け巡って太陽と風に向かって上ってゆく時、私は自分に向かって云った——「気の毒なローラ。何も出来ない彼女は！ …」樅の森で迷い、険しい氷堆石を攀じ登って、溪流を渡ってツルツルの岩で滑りながら、膝まで凍るように冷たい水に濡れて、氷河の十字架のところまで辿り着き、大空だけを背に眼下にひらける世界を見

渡す時、私は考えるのだった——「疲れてはならない気の毒なローラ！ …身動きならないローラは憐れだ…」と。

アルプスの道端で祠や十字架を見かける度に、私は立ち止まって、ローラの病気が治るようにと祈りのことを唱えた。陽光と雨で色褪せた碧い外套にくるまった小さな聖母像に出会うと、私は「聖母さま、どうかローラを元気にして下さい」と小声で呟くのだった。

でも、内心はローラが元気になれないことは分かっていた。

ローラは、憑かれたように情熱をこめて私に縋り付いた。私は出歩く度に、立ち止まって、例の潤んだ眼で私を見つめている彼女に出遭った。女教師は出かけなければならなかったから、学校の女児たちには、いつもはしゃぐ時間があった。《アルプス館》の白い扉の前と緑の窓の下を、彼女は軽やかにゆっくりと通り過ぎていった。

そこで、ある日、私は彼女に入ってくるようにと声をかけた。

それから、彼女を呼び止めて、立ち寄って行きなさいと云った。彼女は長椅子に横になると、書きものをする私を見ながら午後を過ごした。時には、真昼時、二人で出窓に出たりした。私に話しかけないようにと云った。それは、彼女が発熱に見舞われる時間帯だった。彼女の頬が火照って、両手は焼けるようだった。短い黒髪が、汗ばんだ額の上にもつれていた。

彼女がやって来て去ってゆく時には、いつも私は彼女に挨拶の接吻をした。そうする度に、彼女は私に向かってこう云った。

「有難う！」

11月になった。太陽はチェッポ村に顔を出さなくなった。太陽が手際よく後退してゆく様子は、まるで裏切りを画策している不実な愛人のようで、日々少しずつ、ゆるやかに村から遠のいていった。

「当地では、これから冬の間はずっとお天道様は拝めませんよ」と、マリーア夫人は云った。身をかがめて私が手荷物の荷造りをするのを手伝ってくれながら、彼女は「4月になると、再度お目にかかれます。その折には、貴女にもお目にかかれるように期待しています」と付け加えた。

「私もそう願っています」——めったなことでは再訪が認められないことを考えながら、私はそう云って嘆息をついた。

村人たちはこぞって郵便局前に集まり、私の出発を見送ってくれた。ただひとりローラの姿がなかった。

私は、すでに岩と樅の谷間を快適に下ってゆく街道筋を10キロないし12キロほど歩いてゆくことに決めていた。私の新しい友人たちの幾人かは、途中まで同道してくれた。分岐点にさしかかって、樹の幹に座って私を待っているローラを私が認めた時、皆はずでに村へと引き返してしまっていた。彼女は腕に花をいっぱい抱えもって、眼に涙をいっぱい溜めていた。（涙が自分に向けられている場合や、花が私のために摘まれた場合は、涙も花もご免だ。）

「こんなに遠くまで来てはいけないわ。」——私は大声で諫めた——「どうやって帰るつもり？」

彼女は全身を震わせて、「いよいよお別れね、貴女<sup>あなた</sup>のことは決して忘れません」と云った。そして、「貴女<sup>あなた</sup>は私にとって…《輝く妖精<sup>フェアリー</sup>》です」とも。

「何て大げさな！」と、私は笑って、彼女に挨拶<sup>あいさつ</sup>の接吻<sup>せつぶん</sup>をした。

すると、彼女はいつものようにすかさず「有難う！」と呟いた。

「さようなら、ローラ。お帰りなさい。賢明に振る舞うように気を付けてね。卵をたくさん食べるように。」

「さようなら、《輝く妖精<sup>フェアリー</sup>》——彼女は涙ながらに云った。

こうして、彼女を一人ぼっち街道<sup>かいどう</sup>のただなかに残したまま私は別れたのだった。モンテ・ローザを背にして、彼女の小柄な姿は病と憂鬱<sup>ゆううつ</sup>でくすんで見えた。思い出すのは、花は私が持つゆくの<sup>の</sup>に疲れていたように、運ばれてゆく途中で萎れ、あちこちに首をブラブラ振っていたが、私が数キロ進むと、小さな洗礼堂<sup>チャペル</sup>の前を通りかかったことだ。私がそこで立ち止まって、なかを覗いてみると、小さな聖母像<sup>マリア</sup>が、蛇<sup>ヘビ</sup>の頭を誤って踏みつけてしまったことを申し訳なく思っているような温和な態度で微笑<sup>ほほえ</sup>んでいた。聖母は頭に7つの星を戴<sup>いた</sup>っていた。

私は花を祠<sup>ほこら</sup>の前に供えた。「7つ星の聖母<sup>マリア</sup>さま、」——私は祈りを捧げた——「ローラの病気を治<sup>なお</sup>してあげて下さい。」

そして、私は再び歩き始めた。

運命は私を遠くへと連れ去った。そして、一枚の絵葉書<sup>ビクチャーカード</sup>が（それはミラノの住所宛だったが、私が留守にしていたので、転送されて）巴里<sup>パリ</sup>に届いた時、ローラのことなど、もう忘れてしまっていた。はっきりした達筆<sup>たっぴつ</sup>の子供らしい大きな文字で、こんなことが書いてあった。

「《輝く妖精<sup>フェアリー</sup>》に!! …私たち29人の女児<sup>おんなのこ</sup>は、貴女<sup>あなた</sup>のことを慕<sup>した</sup>っています。私たちの女の先生<sup>あなた</sup>は、いつも貴女<sup>あなた</sup>のことを話題<sup>あな</sup>にしています。この春には、森へ出かけて、私たちは貴女<sup>あなた</sup>のために董<sup>すみれ</sup>の花<sup>つ</sup>を摘むつもりです。」

私はくすつと笑った。ローラって、何と感傷<sup>センチメンタル</sup>的で浪漫的な女性<sup>ロマンチック</sup>なのかしら! …私は一枚の絵葉書<sup>ビクチャーカード</sup>を書いて、29人の女児<sup>おんなのこ</sup>全員に感謝<sup>した</sup>のこばを認めた。それに対して、彼女たちは返事の絵葉書<sup>ビクチャーカード</sup>をもう一枚書いて寄こした。その絵葉書<sup>ビクチャーカード</sup>も同じく達筆<sup>たっぴつ</sup>の大きなマル字で、いつもの通りこう始まっていた。

「《輝く妖精<sup>フェアリー</sup>》に!!」

(旅館<sup>ホテル</sup>の受付係<sup>カウンター</sup>は、それを私に持ってくると、ニヤッと微笑<sup>えみ</sup>を浮かべた様子だった。)

そして、春になると、私のもとに董<sup>すみれ</sup>の花<sup>すみれ</sup>が届いた。毎週、色褪<sup>いろあ</sup>せ萎<sup>しお</sup>れてしまった森の董<sup>すみれ</sup>の花<sup>すみれ</sup>が、たくさんの苔<sup>コケ</sup>——まだ湿<sup>う</sup>り気が残<sup>ひしゃ</sup>っていることもあったが——に埋<sup>う</sup>もれて入<sup>ひしゃ</sup>った<sup>ひしゃ</sup>らげた<sup>ひしゃ</sup>包<sup>ひしゃ</sup>み紙<sup>ひしゃ</sup>が届けられた。ミラノから羅馬<sup>ローマ</sup>へ、羅馬<sup>ローマ</sup>からジェノヴァ<sup>ローマ</sup>へ、ジェノヴァからモンテカルロ<sup>ローマ</sup>へ、モンテカルロから巴里<sup>パリ</sup>へと、私を追って届けられてきた…黒い霧<sup>みじ</sup>の一日<sup>アイランド</sup>、惨<sup>みじ</sup>めな愛蘭土<sup>アイランド</sup>旅行<sup>アイランド</sup>から私が倫敦<sup>ロンドン</sup>へ戻<sup>テーブル</sup>ってくると、洋卓<sup>テーブル</sup>の上に、いつものほどけかかった包<sup>テーブル</sup>みが置<sup>テーブル</sup>いてあった。中<sup>テーブル</sup>を見ると、匂<sup>にお</sup>い<sup>すみれ</sup>の董<sup>すみれ</sup>の屍<sup>すみれ</sup>骸<sup>すみれ</sup>が入<sup>すみれ</sup>っていた。そのすべてが、小さな春<sup>なご</sup>の名<sup>なご</sup>残り<sup>なご</sup>りだった!

私は我慢<sup>にお</sup>できずに、その匂<sup>にお</sup>い<sup>すみれ</sup>の董<sup>すみれ</sup>を捨<sup>すみれ</sup>てた。

でも、そこはかとな香気は心に留まっていた。

運命の計らいで、結果的に私は伊太利に舞い戻ったのだった。すると、ある日のこと、来客の知らせがあって、私は胸騒ぎを感じながら、大広間へと入っていった。

部屋の片隅に、小柄な女性が座っていた。その姿は細身で、大きな縮絨獣毛の帽子を被っていた。彼女は立ち上がると、私の方へ心もとない感じで歩み寄ってきた。

「《輝く妖精》さん、私のことを憶えていて？」

それはローラだった。しかも、太って血色も良く小麦色に日焼けしたローラだった。

「ローラじゃない。お元気？ それにしても、とても元気そうね！」

「病気が治って、」——ローラは云った——「体重は49キロなの。」それは、ローラにとっては、通り過ぎだった。チェッポ村では、37キロの体重だったもの。「《輝く妖精》のお蔭なの。」

「シッ！ 相変わらず、そんな大げさな言い方はよして。」——私は厳しく諫めるように云った。そして、彼女を抱き締めた。

私は、彼女が有難うということばを今回は口にしないことに気付いた。

「病気が治ったの。」——彼女は云った——「それは、私のことを勇気づけ慰めて下さった貴女のお蔭なの。私を恐れず別れの接吻をして下さった貴女のお蔭よ。貴女が…」

「それって、卵のお蔭だわ。医師の注射もね。」——私は付け加えて心中で呟いていた——「7つ星の聖母さまに感謝。」

ローラは、学校に2ヶ月の休暇を申請して許可されていた。そして、私といっしょに2ヶ月を過ごしたのだった。

私に話しかけ、私のことを話題にする時、彼女は相変わらず私のことを《輝く妖精》と呼んだ。どうしてもそれを止めさせることが出来なかった。それに——白状しなければならないのか？——初めから、この渾名が私の心を快くくすぐってはいた。家の中で自分がそう呼ばれると、私は微笑を浮かべて、心もウキウキと走り出すのだった。次第次第に、家の他の者まで——ローラのことを笑いものにしようと、また私をからかおうとして——皆がその呼び名で私を呼び始める始末だった。

…それでも、自分がその呼び名のせいで、どのような苦痛と犠牲を強いられているか白状しなければならないとしても、信じてもらう自信がない。

人生には《輝く妖精》でもなく、またそうありたいとも思わない時が、日によってあるものだ。多忙だったり、急いでいたり、生活が順調でなかったり、神経質にイライラしていたりすると、《輝く妖精》呼ばわりされることが耐えられなくなって、ムカつくことがある。

《輝く妖精！》ローラはこの忌々しい二語で、私の存在を悲しいものにしてくれた。それまでの私は、大方自分の好きなようにやってきた。朝は好きな時に起きて、好きな服を着て、笑いたければ笑い、不満ならふくれっ面をした。今は、そうではない。

この頃は、夜明けに、まだ私が目覚めていなくて、精神は遙か遠くの気持ち良い眠りの深みに沈んで惰眠を貪っているというのに、自分の枕もとでは歯切れの良い陽気な挨拶のことばが聞こ

える始末だ。

「《輝く妖精》さん、お早う！」

そうになると、いやでも目覚めて、出来る限り朗らかな笑顔をつくるハメになる。不平を鳴らさず、睨に目覚めた妖精らしく快活に、お調子よく振る舞うことになる。

「あっ！ お早う！ お早う！」

身体が冷え切っても悲しい気分の私は、朝方の憂鬱さの中で仕方なく起き上がると、(身なりをかまわない) 義理の母親から貰った紡毛地の部屋着を羽織って、年代物だが(毛の裏打ちは残っている) 上履きをつっかけようとする。こうして髪の毛を無造作に簪で留めると、自室の扉を開けて、牛乳珈琲を持って来るように云いつける。ある種の〈安逸〉に浸りながら、ひとりですべてを飲み、新聞を拾い読みする。

ところが、遠くから私に向かって挨拶してくる家人の声がする——「妖精さん、待っていますよ、私たち」と。ローラが、鈴のように響くソプラノの声で叫ぶ。

「あっ、妖精さんがやって来る…《輝く妖精》さん！」

私は扉を閉めなおす。鏡を覗いてみて、自分が妖精とは程遠く、むしろ(トスカーナの友人ピアなら云いかねないように) 〈雷を落とす神様〉に似ていると納得する。

腹が立って、私は紡毛地の部屋着を遠くへ脱ぎ捨て、毛の裏打ちの上履きを脱いでから、その片方をもう一方の上にポイと投げつける。服を着て、靴を履き、香水をつける…そして、食堂の敷居でにこやかな表情を作って姿を現す。

「あっ！ 妖精だわ！ 《輝く妖精》！」

教訓譚？ そう。この物語の冒頭で、私はひとつの教訓譚の約束をしていた。

もし、私の物語を読まれる未知の親愛な友人たる貴方の家に、幸運にも女性がいれば——それが妻や姉妹、義理の母親や兄嫁、叔母や姪で、彼女が陽気であれ不愛想であれ、鷹揚であれ狭量であれ、善良であれ意地悪であれ——その彼女に向かって絶えず云い続けることになるだろう。しかも、毎日こう云うだろう。

「ああ、クレリア(ソーティアでも、ルイーザでも、思い付きの名前でもいいが)、貴女で、本当に輝く妖精そのもの！」

あなたの家を極楽にするには、この簡単な手立てで十分だ。

彼女がやや硬く険しい表情をしていたり、あるいは卸業者と喧嘩をしていたり、家政婦を怒鳴りつけたり、料理女を一週間でお払い箱にしようとしたり、五月蠅い子供の頭をパンパンとたたいたりするところを見かけたりすれば、…順番があなたに回ってくる前に、ここぞとばかり間髪を入れず、さっと扉を開けて、優しい声で、こう呼びかけるのです。

「輝く妖精っていうのは、あなたのことでしょ？」

彼女は「そうよ、それは私のこと」と云うでしょう(だって、彼女は「いいえ、私のことじゃない!」とは云えないもの)。

すると、十中八九、嵐はおさまる。



ところが、これでおしまいではない。十中八九、かかる呼び名は、単にその形容に叶った表情を作るように仕向けるだけでなく、彼女の魂まで愛嬌へと傾斜させることだろう。

次第次第に、彼女は慕い愛されるような習慣——それを悪習と云ってもよいが——を身につけてゆくだろう。周囲を明るく浮き浮きさせ、いつも口もとに微笑みを浮かべ、手にはいつも抱擁を、口は《真珠と薔薇と優しいことばに溢れている》自分を感じるようになるだろう。

…かくして、光と輝きを喚起するこの二語を発すると、まるで魔法のように、たちまち私たちの周囲の世界がすべて輝く妖精で満たされることになるだろう。

## V. ランドリュに殺されなかった女 (Quella che Landru non uccise)

パリ、11月26日

…それは、私が愛想のよいド・ジュヴネルや眩しい存在のコレットに挨拶しようと赴いた〈朝刊〉本社から、ちょうど出ようとしている午後のことだった。顔見知りの年老いた案内係りで笑顔の門番が、私を引き留め、折しも編集局の部屋を出て階段を降りてくる女性の方を指さしながら、謎めかして私にこう囁くのだった——「あのご婦人が誰だかご存じかね？」

何のことだか私には解らなかった。そこで、彼は一層声をひそめて、こう教えてくれたのだった。

「ほら…例のランドリュに殺されなかった女さ！」

「ランドリュですって！」——少なくとも10名の女性を殺害した嫌疑をかけられている恐るべき人物像がサッと私の脳裏をかすめた。つまらないキセル行為で（彼はちょっと移動するにも無銭乗車をやっていた）逮捕されたのがきっかけで、人類史上前代未聞の一連の猟奇的犯罪が発覚したのだった。彼と連れだって出奔したある女性は、二度と戻って来なかった。ガンベにある彼の別荘へ連れていかれた二番目の女性は、そのまま消息を絶っていた。彼が結婚を約束していた三番目の女性は、行方知れずのまま…ざっと、こんな具合である。彼の肖像写真が〈朝刊〉に公開されると、パリの方々から、新聞社の編集局や警察庁局部宛に、微笑の〈青髭〉と出奔したまま戻って来ないその他の女性の親族からの手紙や電報や搜索願が続々と舞い込んできた。

（パリから1時間の）ガンベ村の住民たちは、孤立した別荘で彼が思いやりたっぷりに寛いでもらおうといつも新顔の相手を持って来る姿を見かけていた。数週間の間、通りかかった人々は、その女性が無邪気にも楽しそうに庭園内を歩き廻っては花を摘んだり、何百年もの大木の木蔭に座ったりしている姿を認めていた。

優に十回も、ランドリュは陽気な連れ合いとパリからガンベに旅をしていた。とりわけ驚くべきは、彼が自分用に往復切符を、連れ合いには片道切符だけを用意していたことだ。こうした若い女性たちは、揃いも揃って優雅な身分で、豪華な衣装に高価な宝石を身につけていることが多かった…やがて、日が経つにつれて、彼女たちの姿が見られなくなっていった。

目撃されるのは、夜の帳が下りる頃、もくもくと別荘の煙突から立ち上ってくる黄色味がかった厚い煙の雲だけだった。それが嫌な刺すような臭いの煙だったので、通りかかった百姓たち

は、互いに大きな声で云い交わしたほどだった——「あの家では、何と酷い料理を作っていることよ！」（酷い料理とは、よく云ったものだ。）目撃されたのは、（あるいは少なくとも目撃した誰かのことばによれば、）夜中の時間帯に、別荘から出て、ブルギエーレの〈池〉——隣接する森の周囲の深い沼地へ向かってゆく扉を閉め切った謎の自動車一台だった。

「ランドリュに殺されなかった女さ……」——私はもうそれ以上ジッと聞いていなかった。すでに階段の屈曲部で見えなくなっていた女性の姿を追って、私は素早く降りて行った。私は彼女に見えてみたかった。かくも残酷な死から生還した女性が、その顔に過去の恐怖の痕跡を留めているかどうか知りたかった。

私が控えの大広間に辿り着くのと彼女が着くのと、ほぼ同時だった。彼女は、そこを出ようとしながら、こちらを振り向くと、親切にも背後の扉を開けたままに保持してくれていた。

雨が降っていた。モンマルトル表通りを、通行人たちは傘をさして足早に通り過ぎていった。通りの中央を、どれもこれも満席の乗合馬車が全速力で走り去った。

私の自動車は、舗道の側に停車した。

私は振り返って、〈朝刊〉社の玄関口に佇んで、傘も持たずに、そこを出ようかどうかと迷っているように思われるその女性の姿を眺めた。彼女の容貌はとびきり興味があって、黒い二つの大きな眼はほとんど動かなかった。その時の勢いで、私は彼女に話しかけた。

「お伴を致しましょうか……何方まで？」

彼女はやや吃驚した表情で私を見つめ、即答はしなかった。それから、彼女は衝動的に訊いてきた——「貴女は〈朝刊〉編集局の方なの？」

「私は作家です」——私は曖昧な返答をした。

「まあ！」——一瞬の間を置いてから——「それで……私のことをご存じなの？」

私はその時ジッと彼女を見つめて、門番の云ったことばをくり返した。

その女性は咄嗟にクルリと背を向けたが、その顔に名状しがたい表情が過った。それは、瞬時だが顔の輪郭を歪める所謂神経性の痙攣のようなものだった。

「まあ！」——彼女はもう一度くり返した。そして、黙ってしまった。

私はといえば、心理的探究熱がムクムクと頭をもたげてきて、居ても立っても居れなくなった。

「豪華旅館で、お茶をご一緒しましょう」——未知の魂や未知の経験を前にした作家の抑えがたい衝動に駆られ、私はそう云った。

「変な思い付きだこと！」——彼女は大きな声でそう云って笑った。その笑顔が実に素敵だったが、決して納得したという微笑ではなかった。むしろ彼女はその場を立ち去ろうと考えているかのように、表通りの方をチラチラと覗いているのだった。

不意に、羅馬である日著名な外交官から聞いた忠告が私の脳裏をかすめた。「貴女がある人物にある事をしてもらいたければ、」——彼は私に語ったものだった——「相手の眼を、それも両眉毛の中心をしっかりと見つめることをお忘れなく。そうして、やおら自信たっぷりに貴女の要望を持ち出すのです。そうすると、十中八九は貴女の思い通りになるでしょう。」



そこで、私は巴里の舗道に身動きもせず、通行人を気にもしないで、催眠術的集中力を込めて、その見ず知らずの女性の方をジッと見つめた。額の黒い両眉毛の中心をしっかりと見つめて、私は誘いのことばをもう一度述べた。

彼女は、肩で一瞬ためらうような変わった仕種をした…それから諾と云った。

グランドホテルの豪華旅館の談話室は、香水芬々たるおしゃべりな世界市民で溢れていた。楽団は、物憂げな曲〈躊躇 Hesitations〉と躍動的なジャズ〈シミィーシェイクス Shimmy-shakes〉を幾度か演奏した。私たちは、部屋の隅の花と葉陰の間の目立たない席を選んだ。お茶が持ってこられた。

「ちょっと込み入ったことをおうかがいしたいのだけれど」——私は云った。

その女性は興奮気味の視線を私の方に向けて待った。

そこで、私は訊ねた。

「貴女に惚れたの…例の男？」

彼女は、諾という代わりに頷いた。

「彼が人殺しだって判った時、貴女はどう自分に云い聞かせたの？」

しばしの沈黙。やがて彼女はおもむろに喝破した——「承知の上だった。」

「承知の上ですって！…何時から？」

「彼のところを訪ねる前から。マルシャディエ嬢、彼が…」——声の調子が急に落ちて…——「彼に絞め殺されて焼かれた女性は、私の友人だったから。」

「貴女はご存じだった…彼が殺したってことを？」

「そう考えたの。彼女は私に打ち明け話などして、変だったもの。やがて、行方知れずになったわ。どうなったのか、誰にも分からなくなって。」

「でも、それなら…」——続けて云おうとしたが、声が出なかった。

彼女は興奮した眼差しで私をジッと見据えたが、その表情が実に奇妙だった——「勿論、それでも、彼のところへは行ったわ。」

「でも、貴女って…神経症患者なの？ 気が変なのでは？」——私は大きな声で云った。

「多分そうね。」——そして、見ず知らずの女性は軽く肩を竦めるようにしながら——「今時の女って、みんな多少不安定じゃないかしら。そう思わない？」

私は返事をしなかった。私はあつけにとられて、戸惑うようにこの謎の女性に見とれていた。彼女の眼をジッと見つめていると、まるで悍ましい秘密をたくさん隠しているブルギーエーレの池の淀んだ水を覗き込んでいるような気がした。

その間も、楽団は哀愁を帯びた円舞曲を奏でていた。傍の女性はサッと私の方を振り向くと、こう云った。

「私の心の中までご覧になりたい？ それでは…」

蒼ざめた唇の彼女は、顫る両手を膝の上でギュッと握りしめながら、次のような話をしてくれた。

「知っておいて頂きたいのは、私がしきたりとか見慣れている卑俗なものすべてを常日頃

から毛嫌けきらいしているってことなの。

私の夢は、普通でない数奇な人生を生きることだった。私は、素晴らしい色恋沙汰アヴァンチュールや奇妙な恋愛関係を夢見ていた。

ところが、私の人生は、退屈たいくつ極まりない旧弊きゅうへいだらけの灰色の経路を辿る運命にあるように思えた。私の父は、小さな村こやしやうにんの公証人こうしやうにんだった。4人姉妹の長女の私は、音楽的な才能に恵まれているように見えた。事実、7歳になった時、母は洋琴を私に教え始めた。最初はディアベリディアベリ<sup>1)</sup>から始めて、チェルニーチェルニー<sup>2)</sup>に移り、やがてクラマークラマー<sup>3)</sup>を終えて、ショパンショパン<sup>4)</sup>のマズルカに進んだところ…第3番目のマズルカに取り組んでいた時に、急に母が亡くなった。

すぐ下の妹は、当時8歳だった。その妹に私が音楽の手ほどきをするように、父は望んだ。こうして、私はもう一度ディアベリやクラマーやチェルニーをさらえた…ショパンのマズルカに入った時、妹は村の薬剤師やくざいしと結婚してしまった。

残る二人の妹は、当時9歳と10歳だった。そこで、彼女たちともディアベリとクラマーなどをさらえなければならなかった。

今回は、チェルニーに入った時、村長の息子と私は駆け落ちして、パリパリへ行った。

そこで、私はあれ程も夢見ていた数奇な冒険人生を始めようと願ったのだった。ところが、村長の息子は着くが早いか私を捨てた。そこで、私は生活のために、ディアベリやクラマーやチェルニーやショパンを習いたいと思っている女の子たちを見つけなければならなくなった。

人生いやけに嫌気がさして、私は死にたいと思った。少なくとも、死は自分で選べて、思いのままになった。

《誓うわ！》— ある日、私は友だちのセリーヌ・マルシャディエに向かって云った — 《人生はご覧らんの通り。死は、私たちの思いのままになる。自分の人生のバツドラマとしない芝居に、意外性のある決着をつけたいと思うの。》

彼女は笑った。そして、私が浪漫的で興奮ロマンチックしやすい点を非難した。セリーヌはやや有産階級ブルジョワ的心情の持ち主だった。そのささやかな有産階級ブルジョワ的婚資こんしを、彼女は結婚生活の静かな幸福たんぼの担保にしていた。

実際、彼女は夢に見た婚約者フィアンセに出遭であった。それは、頼たのもしい髭ひげを置いた礼儀正しい実直な人物で、田舎に別荘があつて…ランドリュと云った！

セリーヌは、その婚約者と連れだって、ガンベの別荘へ出かけた。一週間後には戻ると私に告げた。

彼女は、杳ようとして行方知れずのままだ。

私は、彼女から奇妙な手紙を受け取った。

《この別荘は、》— 彼女は述べていた — 《薄気味悪いうすきみわる。私の部屋の寝台ベッドの側の壁全体に、黒い染しみが一面に付いている…庭はぞっとするほど気味が悪い。どうでしょう、その隅っこの枯葉の下で、私は2匹の犬と1匹の猫したいの屍体を見つけたのだから。3匹とも首ひもに紐が巻き付けられていて、しかもそれが靴屋の使用する瀝青表面加工ピッチコーティングの紐ひもだった…この家には、その類の紐ひもならたくさ

んある…》

翌日の日付がある2番目の手紙は、こんなことを語っていた。

《この男はきっと偏執狂へんしゅうきやうだと思う。一日中、私に枯葉を集めて台所へ運ばせたりするのだもの…明日、巴里パリに戻ります。》

彼女から3通目の音信メッセージが届けられた。それは、私自身が書いた郵便葉書はがきで、すっかり皺しわくちやになっていた。彼女は宛先を鉛筆で消して、私の住所に書き直していた。文面は、ほとんど読めなかった。道端みちばたに捨てられていたのを誰かが拾って投函とうかんしたように、紙面は泥まみれだった。こんなことが書かれている。

《今すぐやって来て。お願い。彼は狂っている。大きな火を点火している最中で…何だか怖い。》

急遽きゅうきょ、私は隣の女性とその息子と一緒にガンベに急行した。別荘は閉ざされていてシーンと静まり返っていた。村の人は何も知らなかった。

その翌日も、その次の日も、単身ガンベを訪ねたが、庭園の入り口はいつも閉まったままだった。

三月の灰色の午後、私は一人で三度目の訪問をした。ちょうど気が滅入めいってしょげかえていた私が、引き返そうとしていた矢先のことだった。駅へと向かう人気のない道で、私は不意に一人の男と鉢合わせはちあになった。それが、何と彼だったのだ。

すぐに彼だと、私は察しがついた。セリーヌが特徴を書いて寄こしていた通りだった。

私は、麻痺まひの発作おそに襲われたかのように立ち止まった。その男は私を直視したが、私が受けた印象は、背筋が寒くなると同時にゾクッとするような魅力だった。私は身動きせずただずに佇んで彼を眺めていたが、まるで蛇へびが背中を這はっているかのようなゾクゾクする寒気を感じていた。

〈こんばんは〉 — 彼は云った — 〈誰かをお捜さがしですか？〉

奇妙きょうわに柔和な低い声だった。

〈ええ。〉 — 私は口ごもった — 〈捜さがしているのは…セリーヌ・マルシャディエしょうそくの消息つかを…掴みたくて。〉

一瞬の沈黙。やがて、その男は一步こちらへ近寄った。

〈別荘へお越し下さるつもりであれば…〉 — 彼は云った — 〈お教えできますとも。〉

私は叫び声をあげて、逃げ出したくなった。私は、すでにこの悍ましい人殺しの狂人に追いかけられて、叫びながら人気のない道を走ってゆく自分の姿を思い描いていた…彼は、蠟屈症患者カタレプシー者<sup>5)</sup>のように私が身動きしないように睨にらみつけていた。私は、話すことも動くことも出来ない状態だった。

彼は、藪やぶから棒に私の片腕を一方の手で掴つかんだ。まるで夢遊症ソムナンビュリズム<sup>6)</sup>の女のように、私は彼に付き従った。

彼とあの屋敷に閉じ籠こもった時に感じた気分は話したくない。私がセリーヌのことをもう一度訊たずねると、彼は云った — 〈ひとまず食事にしましょう〉と。

彼自ら夕食の準備をしてくれ、笑いながら〈学生向けですが〉と云った。

〈お嬢さん、この種の冒険がお好きですか？〉

そして、私は内心こう考えていた。

《私を始末するのは何時なのだろう？ その手段は？ …いきなり首を掴んで、絞め殺すのかしら？ あるいは、用意してくれた葡萄酒に、すでに睡眠薬か毒薬を入れたのかしら？ …》

そうした間も、彼は私に話しかけていたが、それがとりとめもない話題だった。

私の方は、彼をジッと見つめていた…眼を離さずに。その黒い神経質な手を見つめて…その両手がセリーヌの華奢な首のまわりにかけている有様を思い描いた…

すると、彼は彼女の話を語り始めた。彼女は米国に発つたと云う…

そのことばを聞くと、私は臓躁症発作のようなものに襲われて、痙攣性の笑いがこみ上げ、激しく吹き出してから、すすり泣きをした。ランドリュは、吃驚した様子で、私を眺めていた。

彼はいきなり立ち上がると、隣接した部屋——それが台所だったが——へ行って、小さな酒杯に入った薬用酒を一杯もって戻ってきた。

〈飲みなさい。〉——彼は命じた。

私はまだ笑っていた。歯はガチガチと鳴っていた。全身が、ブルブルと激しく震えていた。彼の手から酒杯を取って、咄嗟に彼を見据えながら訊ねた。

〈毒薬なの？〉

彼はハッとした。私は、その眼差しに驚愕と狂気の光を認めた。

〈あるいは…〉——私はすすり泣きをしながらも笑って、続けて云った——〈あるいは絞め殺すつもり？ そうよ…そうなのだわ…瀝青塗りの細紐で、私を絞め殺すのでしょうか。2匹の犬とあの猫を絞め殺したように？ …〉

彼は勢いよく前進すると、私の両手を握った。彼の恐るべき顔が、私の顔のまじかに接近した…とうとう 最期の時が到来したと感じた。これこそ最期だとの思いが、パッと閃いた。望み通りの変死、破天荒な最期…

私は彼に向かって、それを口にした。彼に面と向かって——おそらくそれだけが自分を救ってくれる手段と本能的に実感して——死にたい…それも殺し屋の正体を百も承知している彼の手で喉を搔っ切られて死にたいと叫んだのだった。

〈殺して！ ひと思いに！ …このような死にざまでなければ！ 首に手をかけて…グッと力を入れなさい！ 絞めるの！ 肉に爪を食い込ませて…〉

そして、私は官能の歓びに喘ぎ声を上げた。

彼はギョッと眼を見張って、後ずさりした。

〈何て女だ！ 手に負えない！〉——彼は大きな声で云った——〈ああ、困った女だ！ …〉

私は救いを実感した。自分に対する情熱に似た何か、その悍ましい男の中に芽生えるのを感じ取った…

外は、すっかり夜の帳が下りていた。しかも雨が降っていた。庭園にザーッと雨水が流れる音

や、広大な邸宅の周囲をビューッと風が舞う音が聞こえた…凶悪な存在は、その悪魔的魂の深淵しんえんに露あらわにしていた。

彼は項垂うなだれた格好かっこうで、細く黒い手で髭ひげを撫なでながら小声で話した。

〈私のことを解わかってくれたのは君だけだ！〉——彼は呟つぶやいた——〈女と見ると、他の男なら《あの女は性交セックス中には、どのような姿態ポーズをとるのだろう？》と自問自答することはご存じの通りだが、私はそうじゃない。女を見ると、私は《どのような状態になるのだろう…死に際しては？》と自問自答する。女は必死でもがき、絶叫むして噎むせ返むるのだろうか？あるいは、痛めつけられた仔犬こいぬのように、キャンキャンと鳴き声を上げながら、身を振よじるのだろうか？…気に入った女さいごの最期さいごを是非とも見届けなければとの思いが、私に熱狂よくどうのように、慄動よくどうの発作のように生じて…〉

話し手の女性は、恐怖譚ホラーを中断して、顔おおを覆おおった。豪華旅館グランド・ホテルの楽団は、《木蔭Shadow *Shadows*》シャドウズを眩つぶやくように演奏していた。

私は、いきなりヒョイと立ち上がった。

「よして！」——私は叫んでいた——「もうたくさん。聞きたくありません。」

すると、その見知らぬ女性つちけいろは立ち上がった。彼女の顔は土気色だったが、微笑ほほえんでいた。

「神経が細いのね。」——彼女は云った。

そうして、彼女は曖昧あいまいな微笑えみをたたえたまま私に会釈えしゃくして、旅館ホテルから出ていった。

この出遭であいの最初の感動が去った今、私は自問自答してみる——《ほんの一瞬だが、おそらく私は怪物じみた人間の深淵しんえんを覗き込んだのでは？…》

あるいは、マタン《朝刊》紙編集局からやって来た例の女性ライヴァルは、物語作家なら…たぶん私の同僚であり好敵手なのでは？

私には判らない。これからもたぶん判らないだろう。

彼女のことを、名前だって私はまったく知らないのだから。

## VI. 恋の仲立ち… (Galeotti....)

### I.

「…それから、眩暈めまいのような発作に襲われて、倒れないように何かに掴つかまっていなければならぬ。動悸どうきがして、息が詰まるような経験を時々する。場合によっては、急に心臓が停止して、脈が飛んでしまうの…ほら！今だって…」

そして、ヴィーリアは、スッと彼女の女友だちの方に細い手首を差し出した。その手首を、友人は手袋はさをはいた指で挟んで触れた。

「感じるはずよ。10回12回毎ごとに、脈が一度は飛ぶでしょ。一瞬、脈が滞とどって、呼吸が出来ないの。」

「壹いち、貳に、參さん、四、五、…」——女友だちは数える——「あら、ほんとだ。途絶とだえる感じがする…」



「それに、他にも数限りない障害を抱えているの。時に、途切れ途切れにベースの低音域の耳鳴りがすることがある。眼の調子も可笑しいときがある。眼の前に黒い揺蚊が飛んでいるように見えるもの…」

「まあ！ こうした病気すべての治療に何を服用しているの？」

「でも…どうすればね。」—— はっきりしないヴィーリアは、溜息をついた—— 「医師は、沃素膠質溶液治療と高原滞在療法を推奨してくれた。」

つかまの間の沈黙が、心地よい広間を支配した。洋卓の中央に活けられた大輪の躑躅の花弁が、深紅の天鵝絨の絨毯の上に幾つか散った。

「ねえ、」—— クラウディアは、伯爵家の紋章に縁取られた黄金の紙巻煙草容器を衣嚢から出しながら云った—— 「私の見る限り、貴女が必要としているのは、もっと他のものよ。」

「その治療を信用してくれないの？」—— ヴィーリアはやや不安げに訊ねた。

クラウディアは紙巻煙草を一本選んでから、容器で軽く叩いて、火を点けると、天井に向かって、フワッと煙の煙を長く燻らした。

「結構、結構。高原へ行って、沃素膠質溶液を服用するといいわ。」—— クラウディアは云った—— 「でも、情夫も連れて行った方が良くってよ。」

「何ですって？」—— ヴィーリアは身震いをして大きな声で叫んだ。

「その必要性を感じたはずよ。」—— 女友だちは明言した。

「情夫ですって！ そんなこと！ また、どうして？」

「聴きなさい、」—— 平和通りの緑色のトック帽を被った愛らしい顔を背凭れで支える姿勢をとって、クラウディアは云った—— 「だって、神経症に効能があるし、顔色を改善してくれ、性格改善にも役立つもの。強壯剤を飲むように、試してみなければ。如何したいの。沃素治療が有効な年齢なら、恋愛療法だって有効よ。」

「皮肉たっぷりね。」—— ヴィーリアは両手で顔を覆って、大きな声で云った—— 「貴女って、本当に背徳的で恐ろしい女ね。」

「そうかしら。」—— クラウディアは云った—— 「私って正直者で単純な女よ。周囲をご覧になれば、私の云っていることが正しいと納得するでしょう。愛された経験に乏しい女をご覧なさい。酷い干乾びようだから！」—— クラウディアは脚を組んで、見事な靴下の細い片脚をブラブラさせた。

「恐ろしいことを云うのね！」—— 面喰ったような視線を女友だちに向けて、ヴィーリアは大きな声で云った。

「貴女って、病んで干乾びてゆくのよ。」—— クラウディアは猶も追い打ちをかけた—— 「だって簡単でしょ、愛された経験が乏しいのだから。」

「それは違うわ。私の夫は…」

クラウディアは細い片手を挙げ、長い指を全部揃えて、古代印度の偶像の厳かな仕種をして、彼女のこぼれを遮った—— 「貴女の檀那樣の話はよして。貴女のことを愛してくれているとおつ

しゃりたいのでしょ。知ってるわ。でも、それはまったく別次元のお話ね。家族愛のことを問題にしているのじゃないもの。」

「分かってるわよ、ジーノが…ってことぐらいは。」

クラウディアは老いた釈迦フツダの仕種しぐさをもう一度くり返した。

「結婚して何年目かしら？ 確か、ルチャーナは10歳になるわね。」

「11歳よ。ジーノのお蔭かげで、私は最高しあわに倅あおしせな女めになって13年にもなるもの。」——ムツとして、そう云ってのけると、ヴィーリアはやや蒼白あおしろい口元くちもとを嚙くんだ。

「ええ、承知おぼしているわ。」——クラウディアは返事こたへをした——「ジーノが天使エンジェルだってことぐらいは。だからといって、自然の普遍的法則はうそくに変化へんかは生じない。生理学的せいりてきにみて、恋愛感情れんあいというものものは、用語本来ようごの正確せうさくな意味いみからして、4年以上よねんは持続じしつすることはない。とすれば、貴女あなたは9年ねんこの方かた、不完全ふくせんで異常アブノーマルな生活せいかつをしていることになる。」

「まあ、異端いたんも馬鹿バカも程々ほどほどにして頂戴ちやうだい。」

「馬鹿バカを承知おぼで云ってはいないわ。これって、刀圭家トクターのことばよ。巴里パリでも獨逸ドイツでも阿蘭陀オランダでも研究生活けんきゅうを送おくって、何でも知しっている神経病理学者しんけいびりやくがくがそう云っている。彼は研究室けんきゅうしやへ私わたしを案内あんないして、亞爾箇保兒溶液アルコールに保存ほぜんされている大脳標本だうのうひょうぽんを幾いくつか見みせてくれたわ…ともかく、彼が確言かくげんするところでは、神経細胞しんけいじようぼうは4年経過しよんけいこすると…神経線維鞘しんけいせんいしやうに…」

そして、クラウディアは長々と科学的で具体的な議論ぎろんを展開てんげんした。

ところが、ヴィーリアは聴きいていなかった。彼女は夢見まなぞのような眼差まなざしで、蹣跚つツジの桃色ピンクの花弁はなびらが時々静しずかに落お下くだる様子ようすをジッと見詰みめていた。

「おまけに、」——クラウディアは結論けつろん付けて云いった——「貴女あなたの周囲しゅういには、これといって実例じつれいがないもの。ミリアム・ヴォーリらんをご覧らん。32歳さいだっだっていうのに、50歳さいに見えるわ。ジーナ・デル・ボスコらんをご覧らん。なお若いわかいのに、吝嗇けちで、無愛想ぶあいそで、信心家しんしんかときている。カルロッタ・アッレーグリらんをご覧らん。私たちわたしたちより若いわかいのに、木乃伊ミイラみたいに干乾ひからび切きっているじゃない。みんな取り返かえしのつかない不倅ふしあわせな女性にょせいばかり。自分の姿すがたを直視ちくししなさい。そう、一度とくと鏡かがみに映うつる自分の姿すがたを見てみるがいいわ。何なにて顔かほをしていることでしょう！ 恋こひを経験けいけんしたことのない女性にょせい特有とくゆうの退屈たいくつし切きった顔かほをしているから。」

ヴィーリアは笑わらった。彼女はつと立ち上たがると、前まへに進すすんで暖爐臺上マントルピースの鏡かがみに映うつる自分の姿すがたを覗のぞき見た。クラウディアは彼女かのじょに付ついて行いって、片腕はいこで背後せたいから抱かかりかかえるようにした。

「正論せいろんだっだてことがお解わかり？ 貴女あなたには、面白味おもしろみがない。味気あじけないのよ。生気せいけのない眼つきだし、皮膚たるは弛たるんでいて、髪かみの毛けに艶つやがない。貴女あなたの何処どこに生氣はきや覇氣はきがあるの。こんな調子としで歳取としると、5年ごねんもすれば、廢人はいじんどうぜん同然どうぜんね。」

ヴィーリアはまだ笑わらっていたが、底拔そこぬけに陽気ようきな笑わらいではなかった。

「で、私わたしをご覧らん。」——クラウディアは続つけて云いった——「どう、退屈たいくつな顔かほをしているかしら？ 私わたしの髪かみの毛けを見て！」

「私が櫛くしで髪かみを梳すくと、パチパチと音ねがして、火花ひかりが出るの。髪かみの毛けの一本いっぴん一本いっぴんが、まるで

電池バッテリーそのもの。ほら、この私の髪の毛！…それに、私の口、ツルツルでしょ。レンツォ・ガリンベルティがいてくれなければ、私だって今頃は皺しわくちゃ婆ばあになっていたわ。レンツォの存在こそ、私にとって正真正銘しょうしんしょうめいの美容院アンスティチュ・ド・ボテってわけ。」

「そのレンツォ・ガリンベルティって？」——ヴィーリアは吃驚した表情をして、彼女をジッと見詰めた——「ご免ね！…てっきり信じていたもの…私たちの誰もが信じていたもの、アルシエーリ伯爵が…」

「昨年、」——クラウディアは真顔まがおになって云った——「私がジュリオ・アルシエーリあいじんを情夫に持ってから、丸4年が経ったの。そこで、私は彼と別れなければならなくなった。」

「また、どうして？ あんなにも貴女あなたに尽くしてくれているのに。音楽という絆きずながあっても…」

「その理由は云ったでしょ。刀圭家ドクターの理論なの。4年が経っていたもの。だから、私たちの恋愛療法トニックの…効き目がなくなっていた。そして、ジュリオは治療法としても、強壯剤トニックとしても、蠟屈症カクレプシー<sup>5)</sup> 予防薬めんとしてもお役目めんご免だったもの。」

「貴女あなたって呆れた女ね！」——ヴィーリアは云った。

相手は笑って立ち上がった。ヴィーリアは玄関口まで送って行った。

クラウディアは敷居のところほそもてでクルリと振り向くと、女友だちの細面はさを両手で挟んで、ジッと彼女の眼みを見詰めた。

「お願い、私のことを嫌いにならないでね。お願いよ。」

「別に嫌いきらはしないわ。」——ヴィーリアは云った——「ただ、貴女あなたが云ったことは忘れたいだけ。」

「いいわよ。」——クラウディアは応えて云った——「色香いろかも元気もなくなってしまった貴女あなたの姿だけは見たくないわ。」

そして、クラウディアは彼女の頬ほほに接吻キスしてから別れた。

## II.

《色香いろかも元気もなくなって…》——この気の滅入る科白せりふに何日もヴィーリアは拘こっていた。鏡を覗き込む度に、自分に向かって《お前は色香いろかも元気うも失せてゆく》と云ったものだ。やがて、日々のやりくりにかまけて気が紛れた。彼女はジーノの食事の用意をし、彼のために家の整頓をし、ジーノの書類を整理しなければならなかった。ルチャーナの課題ホームワークの心配をし、彼女を散歩に連れ出さなければならなかった。散歩に出ると、決まって色香いろかも元気うも失せてはいないと気付くのだった。誰もが彼女に注目した。男たちの無遠慮ふえんりょで執拗しつような視線が彼女に注がれた。女たちは彼女をジッと眺めては荒さがしをして、魚の目鷹の目で品定めをした。

刀圭家ドクターが処方した沃素膠質溶液ヨウソコロイド<sup>7)</sup>——クラウディアが嘲笑あざわらった治療——は奇蹟きせきを起こした。ヴィーリアは、心悸亢進症しんきこうしん<sup>8)</sup> や不整脈ふせいみやく<sup>9)</sup> や眩暈めまいにもはや苦しめられることがなくなった。人生は素晴らしく生きがいがあるように思えた。

クラウディアは、夫を連れて細々里シシリへ行ってしまった。ヴィーリアは、彼女を見かけなくなっ

てホッとしていた。

ある日のこと、彼女はレンツォ・ガリンベルティにヴィッラ・ボルゲーゼ公園で出遭った。彼は疾走馬場の柵に凭れ掛かって、小走りに通り過ぎてゆく乗馬女性たちを眺めていた。クラウディアが彼のことを《美容院》呼ばわりしたことをふと思い出して、急に笑いたい気分になった。

ガリンベルティ青年は、彼女に気付くと、会釈をした。やがて、彼は血色が良い笑顔の彼女を認めて、遠慮がちに近寄ってくると、一緒にさせて頂いても宜しいかと訊ねた。

話題は、馬や社交界や現代舞踊のことだった。彼は、豪華旅館の演奏会に明日行くつもりだと云った。やがて、話題がクラウディアのことになった。すると、ヴィーリアは笑った。ガリンベルティも微笑んだ。

ルチャーナは幼い女友だちと手を取り合って行儀よく軽やかに、彼らの前を歩いていた。ガリンベルティは女の子の素晴らしい髪の毛——事実、長く縮れた赤毛だった——を観察して、ヴィーリアの方を振り向いて、こう付け加えて云った。

「ほら、華奢な女の子をご覧なさい。もう数年たらずで、貴女に気を揉ませることになるから…」

何故だか分からないが、ヴィーリアはそうした観察に閉口気味だった。そこで、彼女はそそくさと退散しようとした。彼は一瞬スッと背筋を伸ばして、日向に頭を出して、彼女の片手をギュッと握った。

「明日、私と旅館〈エクセルシオール〉で昼食をご一緒に頂けませんか？」

ヴィーリアは首を振った。

「ともかく、…私は行くつもりです。」——《美容院》はそう云うと、意味ありげな眼差しを向けた。

ヴィーリアはルチャーナに声をかけてから、挨拶して、帰宅の途についた。

彼女は鏡を見ながら、帽子を脱いだ。自分のことを美しいと思った。そして、午後の間、顔の按摩を行っては、手と爪の手入れに余念がなかった。7時になって、念入りに化粧をし、今まで着ることがほとんどなかった黄色と黒の衣装を纏った。「まるで三鞭酒の銘柄広告みたいだ。」——夫は彼女の姿を初めて見た時、そう云ってから、ルチャーナに解らないように仏蘭西語で、さらに付け加えて云った——「とっても刺激的なお前には、そそられるよ。Tu es très troublante et émoustillante!」

ところが、その日の晩、ジーノは帰宅しなかった。彼は事務所から電話をかけてきて、これからリッチ宅へ赴いて、おそらく〈土地不動産信用〉に関心を持っている或る議員に会わなければならないので、食事は待ってくれなくてよいと云ってきた。

黄色と黒の服を着たヴィーリアは、ルチャーナと二人きりで食事をしたが、ルチャーナはダダをこねて泣いたりしたので、果物が出る前に就寝させなければならなかった。

ヴィーリアは部屋や広間をしばし歩き廻っては、洋琴を少し弾いてみたり、『伊太利新聞』を

拾い読みしてから、料理女に仕入の清算を任せると、黄色と黒の服を脱いで就寝した。彼女は、人生とは空虚で退屈な制度なのだと独り言を云った。夜中に、またまた耳鳴りがして、心悸亢進の発作に見舞われた。

一方、ジーノはジーノで議員がまったく〈土地不動産信用〉に食指を動かしてくれなかったの嫌になっていた。リッチ宅の料理が最悪で——リッチ老人は英国で暮してきたので、いつもインドカレー風味のソースを所望した——ジーノはほとんど手を付けなかったし、食後のこなれがはかばかしくなくて、暗い顔をして帰ってきた。彼がヴィーリアに慰めてもらおうと、彼女の部屋へ行くと、彼女は起きていたが、冷淡で侮蔑的な態度だった。おまけに、頭から議員の件を疑っていた。

「ちょっとお願いがあるの…議員ですって、それが何なの？ 議員の話などしないで。」

「じゃあ、どのような話題でなければならぬのかね？」——ネクタイを取りながら、ジーノは口ごもった——「インドカレーのことでも？」

ヴィーリアは背を向けると、枕に顔を沈めた。

「リッチ夫人のことは知っています。臆躁症の女で、貴方を戦利品扱いしたいのよ。貴方はチャラチャラして、彼女を元気付け、ご機嫌をとっているじゃない…」

インドカレーは、頂けなかった。ジーノは扉をバーンと閉めて、部屋から出ていった。彼は、浴室に隣接する客間へ行って寝ることにした。扉は開けたままにして、彼は就寝した。

木蔭で縁取られた窓から、夜中に〈刺し蟻〉という物々しい名前の危険な蟲が一匹入ってきた。暗がりの中を、この蟲はグルグルと飛び回り、壁面のあちこちに頭をぶつけながら、止まっては小さく邪悪な銜を開いたり閉じたりした。浴室に続く僅かに開いている扉の帷の上を這い廻ってから、遍歴を続行しつつ、陶板製の壁だと歩くのに白堊の表面が滑り易いことに気付いた。冷たい陶板を震える銜で探りを入れながら、歩く速度を上げて、もっと居心地の良い避難先へと走って下降した。それは海綿の中で、ふんわりと気持ちよく、やや湿気っていて、暗い通路が沢山あった。慌ててその中へ潜り込むと、無意識ながら二人の運命の裁定者よろしく、そこにどっかと陣取った。

翌朝、ヴィーリアは朝早く目覚めたが、すぐ眼を開けなかった。精神は微睡の中に沈潜したままで、彼女は朝の辛い生活に戻る時間を出来るだけ遅らせようとした。毎日の過酷な即物的現実に戻り立つために、光仄かな夢想から抜け出す気がしなかった。中庭で絨毯を叩く音や階上の住まいで人が歩き廻る登音や家具を動かす音を聞くと、彼女は気分が悪くなった。これといった訳もなく、ただ漠然と、彼女は目覚めるよりも眠っている方がましだと感じていた。まだ覚醒していない想念の底には、一日の始まりで自分を待ち構えている厄介な事態を察知する感性のようなものが存在したのだった。

イラつく絨毯の登音は、執拗に続いていた。隣の住居では、技師の娘がいつものように音階練習の手始めに、くり返し洋琴の音合わせをやっていた。

ヴィーリアは嘆息をつくと、眼を開けた。彼女は眼が覚めた。



思い出すだに不愉快になるのって、何だったっけ？ そうだ、ジーノだった。昨晚、ジーノは食事に帰ってこなかった。そして、帰ってきて、つっけんどんで不作法だった。リッチ夫人が…まさにリッチ夫人だった。そして、ヴィーリアだが、彼女は、馬鹿みたいに、爪を磨いたり、お顔の手入れをしたり、髪の毛を巻き毛にしたりして午後の時間をやり過ごしていた。やがて、夕べの時間まで、馬鹿みたいに一人ぼっちで過ごしてしまったのだった。つまり、彼女は午後4時から真夜中に眠ってしまう時間まで、丸8時間を無為にして化した訳だ。虚空に投げ込まれて、奈落の底に呑み込まれてしまった。二度と取り戻せない8時間を、彼女は生きずに過ごしたのだった。何たる浪費、何たる無駄使い！ 彼女の年齢を考えると、そうした贅沢は許されないことだった。彼女の年齢なら、人生の一時間一時間が貴重なものはずだった。一日の三分の一を、このように捨てて顧みないことは不可能だった。…

《その年齢を考えると》—— 憎たらしい文句なこと！ まだ人生をやり始めていないかのような云い方。本当に—— 他の人たちなら、きっとそう云っただろうから—— 彼女は自分自身に《年齢を考えれば、こんなことはしない…あのようなことはしない》と云い聞かせなければならなかった。

濡れかかっている人が咄嗟の本能として救命板に手を伸ばすように、彼女は思いをジーノに馳せた。ジーノは善良だった。ジーノは彼女を愛していた。ジーノだったら、彼女のことをいつまでも愛してくれただろう。リッチ夫人のことは、ジーノにまったく興味がなかった。時々、ちょっぴり痛い目にあわせて、ちょっとした悶着を引き起こしたい必要を感じた折に、偶にしゃべ返しをするには、ヴィーリアに対する口実としてリッチ夫人が役立ったに過ぎなかった。

ヴィーリアは急いで起き上がると、服を着た。

ジーノは自分の寢床でなかったのでよく眠れなかったし、議員やカレーやヴィーリアの不公平を思い出すと胸糞が悪くなった。彼はいつもより遅い時間に起き上がって、腹立たしい気分で、そそくさと浴室に入っていった。すると、すでに風呂が用意されていて、瓦斯暖房も効いており、化粧水の瓶が手の届く処にあったので、すぐさま彼の怒りは鎮まり解消した。ヴィーリアは後悔していたし、尊敬に値する償いをしてきていた。ヴィーリアは天使だった。リッチ夫人は手におえない女性だった。彼のために印度カレーやなお一層印度的な議員を用意したリッチ夫人は、もうご免だ。

ジーノは上履きを、まるでそれがリッチ夫人でもあるかのように遠くへ蹴飛ばし、寝間着を、まるで議員でもあるかのように脱ぎ捨てた。彼は入浴を済ませた後で、ヴィーリアのところへ行って、両手に口づけし、愛の言葉を述べる決心をした。

例によって彼は入浴する前に、海綿を掴んで湯につけ、それを顔にあてがった。急に彼の頬の上を何かかが走ったように感じた。彼は手で顔を叩いた。得体の知れないものは、髯やもう一方の頬の方へと走った。いったい何だったのか？ ジーノは鏡の中を覗き込んだ。それは《鉄》だった。海綿から出てきた一匹の刺し蟻だった。

「不潔！」—— ジーノは海綿を放り投げながら叫んでいた。そして、耳の方へ走って行こうと

する蟲を襟首から振り払おうとした。ジーノは、素肌が突っ張るような感じがした。不快感を  
持っただけでなく、彼は不安にもなった。老家政婦がかつて彼に語ってくれたが、その蟲が耳に  
侵入すると、人は発狂するのだそうだ。そのゾツとする話は、彼には忘れられないものだった。

不潔な昆虫は何処へ行った？ 消えてしまったぞ！ 何処にいったの？ ジーノは耳の  
中を指でほじくった。彼は盛んに罵りのことばを並べて、素足で地団太を踏んだ。家政婦を呼ば  
うと呼び鈴を鳴らし、締切った扉越しに叫んでいた。

「この家は豚小屋だ。それに、蟲だらけの海綿ときている…これは恥だ。」

彼は入浴もせず、ヴィーリアの両手に口づけもしなかった。彼は、ヴィーリアがルチャーナ  
共々珈琲を飲もうと待ち構えている食堂へも入って行かなかった。家の出口の扉をバタンと  
閉めて、彼は外出すると、喫茶店で恨めしい珈琲を飲んだ。

正午になって、彼は心機一転大人しく帰宅した。ヴィーリアは留守だった。

ウルウルと涙眼をした髪の毛がバサバサのルチャーナしかいなかった。母親は晩までには帰る  
と云い残して、11時に出かけてしまっていた。

刺し蟻は、その使命を果たすと、浴室の下で熱気を帯びた昼間をやり過ごし、夜になって外  
に出て木蔭の処に舞い戻った。やれ自分の時間が到来と思いきや、その蟻は一只の仔雀に啄まれ  
てしまった。

## 註および参考文献

本稿で使用したテキストは、Annie Vivanti [Anne George Marion Vivanti] (1866-1942), *Gioia!* (Firenze, R. Bemporad e figlio 1921) で、本短編集所収の『輝く妖精』、『ランドリュに殺されな  
かった女』、『恋の仲立ち』と題する第4篇から第6篇(95頁から134頁まで)の3篇を本邦初訳  
として試みに邦訳・紹介してみた。

アン・ジョージ・マリオン・ヴィヴァンティは、ロンドンに生まれた完璧な英語・イタリア語  
両言語作家。父親はオーストリア軍からガリバルディー派として死刑の宣告を受け亡命生活  
を送ったアンセルモで、母親アンナ・リンダウはユダヤ系のドイツ人。(スイス、米国、英国と)旅  
に明け暮れる不安定な少女時代を経験する。ジョージ・マリオンの筆名で英国文壇に初登壇し、  
やがてローマの雑誌《ドン・キホーテ》の寄稿者になる。1887年、オペラ歌手を目指す決心を  
してイタリアに移住し、歌唱と外国語の教授職に就く。様々な努力を重ねた後で反故にされてきた詩  
集『抒情詩』(1890)によってイタリア文壇に初登壇する。トレヴェス書肆が出版の条件として詩  
人の紹介を義務付けていたので、カルドゥッチが序文を書いた。カルドゥッチは、「僧侶と女は詩  
に不向き」とする自身の信念に叛いて、それを承諾したのだった。このようにして、アニー・ヴィ  
ヴァンティの成功は始まるが、すでに老境の詩人は、彼女の若さと美貌にすっかり魅了されて、彼  
女にしきりと書簡をしたため、文学界に推薦する。事実、彼の最良の抒情詩の何篇かは彼女に捧げ  
られている。ふたりのあやしい関係は物議を醸した。1892年、アニーは、自伝的な蓬髪派風長  
編小説『カフェ・コンセルの芸人マリオン』を出版する。米国人記者ジョン・チャターズと知り  
合って、結婚し、米国へ移住するが、カルドゥッチとは頻りに文通を続けた。定期的にイタリアに  
戻って来てはいたが、やがて定住するにいたる。ユダヤ系の血を引いている廉で弾圧を受け、第二  
次世界大戦中は、他の英国市民たちとともにアレツォに軟禁されていた。しかし、彼女にとって

最大の痛手は、ロンドン空襲による天才的ヴァイオリニストだった娘ヴィヴィアン・シャルトルの非業の死(1941年)だった。やがてトリノに移り、1942年4月20日、困窮のうちに亡くなる。幾篇かの長編小説を残したが、そこに批評家たちはどのような文学的モデルにも属さない直截的で自発的で理想的な女性解放の姿勢を認めている。

- 1) Anton Diabelli (1781-1858) 当初 M. ハイドンに作曲を師事して、J. ハイドンの後押しで音楽教師をしながら音楽出版に従事した。家庭用練習曲集『ピアノのためのソナチネ Sonatine』 op. 151, op. 163, op. 168 や『ピアノ連弾用ソナチネ曲集 Sonatine』 op. 24-1, op. 24-2, op. 54, op. 58, op. 60 および『旋律的練習曲集 Melodische Übungsstücke』 op. 149 が知られている。ディアベリ当時のウィーン・アントン・ヴァルター (1752-1826) 社製ピアノの音色を知らなければ、ニューヨーク・スタインウェイ社製現代ピアノでいくら練達の名人の演奏を聴いても意味がない。軽いアクションのアントン・ヴァルター社製ピアノは、歯切れのよさと奥行ある響きを特徴とする。
- 2) Carl Czerny (1791-1857) ロマン派初期様式の開拓者にしてピアニストのヴィルトゥオーゾ。ベートーヴェンに師事して、F. von リストや S. タールベルクなどを門下生として輩出。ピアノ練習曲集『熟練の手引き Die Schule der Geläufigkeit』 op. 299 『ヴィルトゥオーゾの手引き Die Schule der Virtuosen』 op. 365 『指使いの技法 Die Kunst der Fingerfertigkeit』 op. 740 『技巧の練習曲 Die Schule der Geläufigkeit』 op. 849 で知られている。美しい音色で評判の19世紀ウィーン・シュトライヒャー一族のピアノで、チェルニー時代の響きを知る必要がある。
- 3) Johann Baptist Cramer (1771-1858) ムーツィオ・クレメンティ (1752-1832) にピアノを師事、パリで暮した後、ロンドンに定住して優れたピアノ教師として名声を博した。練習曲集『実践的ピアノ教本 Grosse praktische Piano-Schule』全5巻など多くの作品がある。英国ブロードウッド社製ピアノで、高均一な音色とダイナミズムを特徴とするクラマー時代の響きを聴かなければ意味がない。
- 4) Fryderyk Franciszek Chopin (1810-1849) フランスのピアノ製作者カミーユ・ブレイエルの名器でショパン時代の響きを現代によみがえらせたCD『浜松市楽器博物館コレクションシリーズ 10 ノクターン』を聞けば、ニューヨーク・スタインウェイ社製現代ピアノによって一掃されてしまったショパン芸術の神髄に触れることができる。
- 5) 蠟屈症(強梗症) catalepsy [G. *katalepsia* < *kata*, down + *lepsis*, seizure] 四肢がさまざまな位置にしばらくの間固定されてしまう蠟様強直の状態のことで、刺激に対して無反応・無言・無活動となる。特にカタトニー性統合失調症などの精神病で起こる。
- 6) 夢遊症 somnambulism [L. *somnus*, sleep + *ambulo*, to walk] *somnambulance*, *oneirodynia activa* 複雑な運動性行為も絡んだ一種の睡眠障害で、主として夜中の前半の三分の一ぐらいまでに起こり、急性眼球運動期には起こらないとされている。
- 7) 沃素膠質溶液 Jodarsol 伊吹麝香艸の葉に含有される結晶性フェノールを沃化した膠質溶液(沃化チモール *thymole iodide* [thymolis iodidum] ( $C_6H_2CH_3C_3H_7OI_2$ ))
- 8) 心悸亢進症 palpitationi (動悸 tachysystole, palpitation, Herzklopfen) 心臓の拍動を自覚する状態のことで、心拍数の増加ないし心拍の増強や不整脈が原因の場合もある。症候性と器質的心疾患性、薬剤や酒、莠、珈琲の過剰摂取および不安神経症由来などに分類される。
- 9) 不整脈 aritmie, arrhythmia, pulsus irregularis 健常者では心拍数は毎分70前後で、ペースメーカーの洞結節の興奮が両心房と心室に刺激伝導系により伝えられ極めて規則正しい調律すなわち正常洞調律を示す。緩急は交感神経と迷走神経によって調節されるが、何らかの原因によって正常洞調律以外の心収縮や調律を呈するものを不整脈と称する。一般に心電図により原因は判明する。

- 小倉貴久子著『カラー図解 ピアノの歴史 — 作曲家が愛した当時のピアノで奏でる CD 付』河出書房新社 2009
- 南山堂『医学大辞典 MANZANDO'S *Medical Dictionary*』MANZANDO Co., Ltd. Tokyo 1985
- 『最新 医学大辞典 ISHIYAKU SHUPPAN'S *Medical Dictionary*』医歯薬出版株式会社 1990
- 『ステッドマン医学大辞典 STEDMAN'S *English-Japanese Medical Dictionary*』(株)メジカルビュー Medical View 社 2004